

# 日本記者クラブ会報

第183号  
1985年  
5月10日発行

東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一  
プレスセンタービル9F ☎100  
◎ 社団法人 日本記者クラブ  
電話 五〇三一二七二二(代)

## 残念ながら、受賞者なし

### 六十年度日本記者クラブ賞

四月二十四日の第八十九回理事会は、五十九年度収支決算案などを了承し、それらを五月二十日の通常総会に上程することを決めた。

しかし本年度の日本記者クラブ賞については、渡辺襄選考委員長の「残念ながら受賞に値する候補はなかった。今回は見送りたい」との答申をいれ、受賞者なしとした。

クラブ賞は四十八年に創設され、初年度の受賞者がなかっただけで、四十九年以来毎年一ないし二氏に授与、それぞれをクラブの名誉会員として遇してきたが、今年は一十一人ぶりの受賞者ゼロの年となったわけである。

さる二月二十六日に開かれたクラ

ブ賞推薦委員会(内田健三委員長、青木彰、村尾清一、村上孝止、野崎茂、入江徳郎委員)には一般会員から推された十候補が出されたけれども、各候補の業績にかなりのバラツキがあり、クラブ賞の性格につき共通のイメージを固めるべきだと考えて全員が一致した。そして(1)現役ジャーナリストに与えられる最高の賞、(2)長期にわたる「敬老賞」とも、

「風雪賞」とも一線を画す、(3)クラブ賞ではなく数年間の業績をたたえ、(4)その存在および業績がジャーナリズムの活性化と成熟にインパクトを与えるような個人を顕彰、という性格づけがなされた。

以上の観点で各候補を個別に評価

し合ったが、全員一致で推したい候補がなく、その論議のなかで別にも名の候補が推されたが、それを加えても受賞候補なしと選考委員会に答申することを決めた。

それを受けた四月九日のクラブ賞選考委員会(総務委員会委員で構成、渡辺委員長)では、賞の権威を維持するためにも受賞者なしの年があってもかまわぬとの意見と、つとめて受賞者をとの意見に分かれたが、内田推薦委員長の報告を尊重し「受賞者なし」と理事会に答申することとなったわけである。

十年ひとくぎり、諸事見直しや手直しの時機、ということだろうか。クラブ賞候補を推薦し選考する手順や方法も、そろそろ見直す時になったというわけである。

したがって候補を会員一般から募集し、それを推薦する手続き、選考方法や表決方法などをあらためてルール化するため、総務委員会がこれ

までの「クラブ賞規約」を補完する「内規」をつくることになった。そうした作業のなかでクラブ賞の性格を鮮明にし、明年以降は会員社、会員諸氏からの積極的推薦をおおぎたい、という次第である。

### 八階にスペース拡張

理事会はそのほか、スペース拡張にゴアのサインを出した。八階に約二十坪の部屋を契約し、それを会員の会合、会議、対談、インタビュー、小規模パーティーなどに使ってもらうことにし、内装その他の細部は施設運営委員会に一任、となった。

五月二十日の総会の日の記念講演(午後五時)は陳舜臣氏の「歴史と情報」に決まった。

### 五月一日現在の会員状況

法人会員	一四六社
基本会員	六三一人
個人会員	一、二三九人
法人・個人賛助会員	七三社 二一三人
特別賛助会員	七三人
名誉会員	一七人
計	二一九社 二、一七三人

とっておきの話

クレーデター直後の  
ビエンチャンへ

土肥良造

「実に異例な内容の特派員記事

だ」と当時、日本新聞協会など関係者たちを驚かせたのが、昭和四十年二月四日付朝日新聞・朝刊の第三ページ右トップ五段、「混乱のビエンチャンに入る」という大見出しで飾られた、秋岡特派員のラオス内戦現地第一報だった。「さすがに朝日さん」と秋岡記者の「一番乗りスクープ」に感心するとともに、さらにその記事本文末尾のカッコ内になんと「この記事は秋岡特派員が共同通信の土肥特派員と共同執筆したものです」と書かれてあったのを見て驚いたのだった。

なぜならば大体、通信社記者の記事が全国紙（地方紙の一部も含めて）の紙面に掲載される場合、通信社名のクレジットだけで記者

名は、たとえスクープであって

も、記入されないのが通例になっているからだ。それだけにこの「朝日」記事が全く型破りで新聞人や関係者らを驚かせたのも当然であった。なんらかの現場事情から、特派員団のブル原稿による報道スタイルもあることは、皆さんよくご存知の通りだ。だが、このビエンチャン発原稿は「変形プーラー」とでも言うべきか、実に異例なものだった。

ではなぜ、いかにしてこのような記事が生まれたのであろうか——。「あの当時の出来事は、まぶたを閉じれば今なおありありと浮かんで来ますよ」と秋岡家栄氏（個人会員・朝日中国文化学院前学院長）は言う。ほくも全く同じ思いだ。

一九六五年一月三十

一日午後ラオス・クレーデター突発、このニュースが外国へ流れ始めたのが翌二月一日朝のこと、これをぼくはサイゴンで知った。一月

下旬の南ベトナム・クレーデターで多忙の「共同」林サイゴン支局長を手伝うため、急ぎょシンガポールからサイゴン入りしていたからだ。「ラオスはまかせておけ」と林君に声をかけて、ぼくはラオス大使館へ走った。「共同」サイゴン支局再開前まで、主としてぼくがインドシナ地域をカバーしていたので、ラオスなどまるで「わが家」のようだったからだ。

ビザ発給がスローモーでいらいるらする特派員たちの前に、米テレビチームの一人が駆け込んで来た。「クレーデター失敗、ビエンチャンは平静だそうだが」。情報確認のため、みんないっせいに米国大使館へ移った。ビエンチャン米大使館からの情報、つまりCIA情報は「和解協定成立、市内に平静戻

る」だった。もうラオス行きの必要もあるまいと、みんな引き上げ、ぼくも同様でマジエスティック・ホテルへ帰った。

明けて翌朝、「サイゴン銀座」カティナ通りで、知り合いの英語ができるラオス人「情報屋」とぼつたり出会った——「クレーデター終わったそうだな」と言うぼくに対して、彼は「終わってなんかいませんよ、またすぐロケット弾です」と一言、そそくさと足早に消え去った。はて本当なのかな、とちよいと戸惑った。だが結局ぼくは彼の意味ありげな言葉の方を選んだ。

というのも、東南アジア取材での情報源の一つとしてCIA筋もさることながら現地人、特に各地に広く深く根を下ろしている華僑系情報は、多くの場合CIAに勝るとも劣らぬ確度があるからだ。ただしより良い相手とのコネを持つことだ、と一九六三年初めて東南アジアに足を踏み入れた「赤ゲット」的特派員のぼくに對して、東南アジア通のベテラン記者た

# 混乱のビエンチャンに入る

## 無人の町に武装兵

### 各所に絶え間ない砲撃

## 邦人は大使館へ避難

## 警察隊、市内を砲撃

【本紙記者の現地取材】

ベトナムの首都ハノイから北に約200キロ離れた北緯17度線に接する北ベトナムと南ベトナムの境界線に、北ベトナム軍と南ベトナム軍の激しい砲撃が繰り返されている。この砲撃は、北ベトナム軍が南ベトナム軍の拠点を攻撃しているものと見られる。砲撃は、北ベトナム軍の機銃部隊が南ベトナム軍の兵士に向けて行っているものと見られる。砲撃は、北ベトナム軍の機銃部隊が南ベトナム軍の兵士に向けて行っているものと見られる。砲撃は、北ベトナム軍の機銃部隊が南ベトナム軍の兵士に向けて行っているものと見られる。

（昭和40年2月4日付朝刊） 末尾に土肥共同特派員との共同執筆のことが書きがっている

（行け）。 やつと の思いで 空港から 市内に入 り、市外 の日本大 使館へた

ち、ロイター現地総支配人D・チップやJ・ハーン、陳加昌（現シンガポールPANA社長）各氏がアドバイスしてくれていた。

まさしくその通りで例え、ベトナム報道で二、三度編集局長賞に輝いた林雄一郎支局長（現編集局長）の記事も、現地人たちの親交を通じて得た確度の高い情報が基になっていた。ぼく自身のことでおこがましいが、一九六五年二月十八日共同配信で全世界へ流された、ぼくの南ベトナム新クイデータ予告スクープ記事は、ル・モンド紙で「多くの在サイゴン特派員の中でこの正確な予告をただ一人報じたのは日本人記者だっ

た」と高く評価されたが、これもあり華僑系ベトナム人からの情報のおかげだった。

さて、やつとのことに乗ったエア・ベトナムDC3型機がビエンチャン・ワットタイ空港に着陸したのが二月三日午前、機内ドアが開かれた途端にすさまじい銃撃戦の音が飛び込んで来た。機長が叫ぶ――「客は降ろさない、すぐ離陸する」。貨物だけを放り出そうとするのを見て、ぼくは機長の手を振り切り、貨物と共に滑走路に転がり落ちた。機関銃隊の兵士に向かつて、ぼくは必死にどなった。ニープン、ニープン（日本人だ）バイドゥー、バイドゥー（通してくれ）。

どり着くまでの模様は紙面の都合で省略する。常宿オテル・コンステランオン支配人を巧みにだまして無人の市内へ飛び出し、大きな日の丸とラオ語で日本人客であることを書いたシャツ姿で、ロケット弾の合い間をかくぐり、ようやく日本大使館にたどり着いた時、「よくもまあ無事に……」と大使館員らと一緒に迎えてくれた一人の日本人記者、それが「朝日」秋岡特派員だった。

移動特派員として東南アジア各地を歴訪取材中の彼は、ジャカルタ取材後バンコクで「読売」山本和郎支局長（現編集局長）の勧めで二月二日夕ビエンチャン入りした途端に内戦再開、大使命令で在留邦人が大使館へ避難という有様、ロケットの流れ弾が同館に落下するなど危険なため、一歩も外へ取材に出かけられないままだったとのこと。そこで、戦闘再発前（秋岡）、その後の生々しい模様（土肥）を二人で共同執筆となった。大使館の外交無線便乗も和田大使の快諾でOK、共同執筆による一本

の原稿が外務省経由で「朝日」と「共同」両デスクに入電、翌四日の各社紙面を飾ったのだった。

その原稿に添えられた「注意」（共同執筆であること）は「朝日」側は前述の通り明記、通信社記者の協力活動をたたえてくれた。一方「共同」が配信した加盟社の紙面はどうだったか――十社の地方紙を調べてみたが、残念ながら「朝日・秋岡特派員との共同執筆」という注は見られなかった――なぜなのか、調査は難航中だがなお続けることにしている。

それはともかく、秋岡氏も言う通り、ライバル意識の中でも「報道の責任と相互協力」は貴重なものだ。

どいりょうそう氏略歴 大正六年生まれ。慶応義塾大卒。東京外国語大中退。昭和十七年同盟通信入社、軍役で休戦、復員直後に共同通信社に入る。社会、海外、欧米、外信、整理の各都と国際局（アジア通信社連盟専従）、勤務、編集局デスク（海外写真特信担当）、海外特派員歴はソウル（国連従軍記者）、米軍統治下の沖縄、東南アジア特派員兼シンガポール支局長（東南アジア外国特派員協会副会長）、ソ連・東欧移動特派員。昭和五十二年共同退社後は東南アジア関係のフリーランサー。

# 経済摩擦

# ワーキングプレス

お花見気分がまだぬけない四月九日の中曽根首相の会見は、従来の日本の政治家らしくなく、なかなか説得力があり感心した。しかし、あれだけ言葉をつくしても、一般消費者の財布のひもが、外国との関係改善というのろしだけでゆるみ、外国製品（舶来品）の購買力が急に増える、とは考えにくい。

もちろん、外国のメーカー、日本の貿易関連業界、流通業界にしても、貿易摩擦をなくするためだけに商売をしているわけではない。が、むしろこうした業界レベルでの改善努力がより必要のように思う。

それに、最近話題となっている「内需拡大」を何らかの形で進めなければ、日本と外国との貿易不均衡とそれから生じる摩擦は、なかなか解決しないのではないだろうか。

日本人にとっては、日本市場がすでにかなり自由化されている、という意識がだいぶあるようだ。日本人のアメリカに対するバックラッシュも、数年前に比べるとか

なり強くなっている、という昨年帰国した某日本外交官の発言もある。

先日外人記者クラブの昼食会での大河原前駐米大使の話では、四、五年前は日米の情報ギャップという言葉が流行語であったが、今やそれは、パーセプションギャップ（知覚のずれ）というほうがふさわしい、ということである。

そのずれは、記者の不十分な取

## 取材する側にも問題

### クリストファー・チペロ

材活動という問題からも生じるだろう。例えば、在日外国特派員の場合は日本語の問題がまず大きい。そのハンディのせいで、特定のニュースソースに頼ってしまいい、表面的な取材になってしまふ、といったふうに、何かとかたよってしまふことがある。街の人の話すことも十分分からず、雑誌やポスターに書いてあることも読めなくて、社会の底流まで入り込め

るわけがない。

日本人記者に対する批判としてよく耳にするのは、かれらがグループで取材活動をするため、独自の視点がなかなか出てこない場合があるということだ。

さらにこうした「知覚のずれ」は言葉の問題だけにとどまらず、文化的背景や表現方法などにも関わってくることもある。例えば、電気通信機器をめぐる交渉での米側代表者は、アメリカの記者のインタビューに気軽に何でも受け答えしたのに対して、日本の郵政省の態度は慎重で、本音をあまり言わないといっ

たことが、アメリカの記者たちの印象にいまも強く残っている。これも文化の差なのだろうが、日本では民間会社の人でも官庁の人でも、よほど地位の高い人でないと新聞記事に名前が出ることを嫌う。これは外国人記者にとって大変に困ることである。ニュースソースをなるべく明確にしないと、読者が情報の価値を評価しにくくなるからである。

外国企業の日本市場への進出の際と同様、言葉の問題をのりこえて、さらに日本人の意識に入り込むことのむずかしさは、外国人ジャーナリストにとっても同じである。

日米にとって、また両国のビジネスマンおよびジャーナリストにとっても、相互理解、また理解しようとする努力があつてはじめて、「知覚のずれ」を縮めることができるのではないだろうか。しかしそれには、まだまだかなりの苦勞がいると思う。

（原文は日本語）  
（アジア・ウォール・ストリート・ジャーナル特派員）



首相の「独走」に、後で内閣記者会から抗議も出たが、パネルを使つての異例の総理会見は概して外人記者には好評だった（4月9日） 写真提供=時事通信

# 日本電信電話株式会社

## ワーキングプレス

旧電電公社が民営化、日本電信電話（NTT）に衣替えして早くも一か月余り。東京での二回にわたる新会社披露パーティーも終わり、ようやく平常の落ち着きを取り戻しつつある。しかし、ここに籍を置く記者クラブ「葵クラブ」に所属する記者にとっては、ここ数か月のあわただしさといったらなかつたし、これからもめまぐるしさはたぶん、そんなに変わらないだろう。

### 葵クラブのあり方でも論議

この四月、電電改革三法の施行で明治以来百年余も続いた、官業の電気通信事業にピリオドを打った。同時に、国内通信は旧電電公社、国際通信は国際電信電話（KDD）と守備範囲を決めた独占時代に別れを告げ、この分野に民間活力と競争原理を導入する「通信自由化の時代」に突入した。

これを機にNTTが誕生し、そしてNTTと対抗する第二電電グループ、VAN（付加価値通信網）業者など新規参入者が相次いで名乗りをあげている。わが国の電気通信にとっては大変革である。葵

クラブが忙しくなるのも、無理はないのだ。

葵クラブには十二社、百三十人の記者が所属している。もちろん、このすべてが常時詰めているわけではないが、高度情報社会の到来で「情報・通信」の社会的価値が高まるにつれ、常駐者が年々増えている。それも、一昔前は電話の積滞（申し込んでも回線が間に合わず取り付けられない状態）や通信

ら「兄弟」みたいな間柄で、大部分の記者が両クラブをかけ持ちしている。NTTになった今でも、この状態は変わっていない。

昨年から今年初めにかけて、電民営化をひかえて葵クラブの取り扱いが問題となり、両クラブで慎重に検討された。民間会社に記者クラブを置くのはおかしいとか、「この機に郵政クラブとは分離独立し、情報・通信分野の取材拠点として明確に位置づけ

今後の状況変化に応じて、引き続き検討していくことになった。

しかし、葵クラブの運営では徐々に変化が出ている。電民営化を先取りする形で今年初めから自主運営の色合いを強めており、第二電電グループ、VAN業者、通信機メーカーなどが、ここで記者発表する機会が増えている。四月以降はNTTの発表も、郵政クラブでなく葵クラブ中心を原則にしている。

池田俊作

として尊重されたものの、結局は「NTTに変身しても、自分の間は実質的にNTTの独占状態が続くので、NTTの公共的性格は変わりない」

「将来もNTTの発行株式の三分の一は政府が保有するし、NTTのあり方についても五年後に見直すことになっている」などから、現実的措置として当面は葵クラブを従来通り存続し、郵政クラブとも親密な関係を維持することで一致。あわせて葵クラブのあり方は

ネットワークの事故、故障など社会ダネの取材拠点だったが、今ではそれだけでなく、電気通信事業そのものの役割を取材報道する拠点と変質している。これに伴い、常駐する記者も社会部より経済部、産業部の方に主体が移っている。

もう一つ、葵クラブの特徴は郵政記者クラブと密接な間柄にあること。もともと、この二つのクラブは郵政省と旧電電公社の関係か

ただ、旧電電公社時代は総裁、副総裁がそれぞれ一週おきに定例会見していたが、NTTになってからは社長会見が隔週で開かれ、社長会見のない週は常務以上の役員が持ち回りで、記者懇談会に出席する形に変更された。「民間会社になったからには企業を代表する社長会見だけで十分」との意見と、「従来通り」という主張の折衷案みたいなもの。葵クラブも新しい時代に対応できるよう、模索しているのである。

（いけだし。んさく 日本経済新聞社産業第四部）

# プラズマ実験成功

## ワーキングプレス

四月九日、毎日新聞夕刊の連載漫画「まっぴら君」をみて、思わず吹き出してしまった。テーマは、前日、日本原子力研究所が成功した核融合実験装置の初実験である。

中年おじさんと、分け知り風のご隠居の会話。

中年 「原研の臨界プラズマ装置が運転を開始したな」

隠居 「地上のミニ太陽といわれる核融合実用化へ第一歩だ！」

△……………▽

このあとの会話がスラスラ続けばいいのだが、続かないのであった、のキャプションがおおじ。

そうだろうな。このあたりが読者の理解度なんだろうな、と思う。社内読者だって変わりはない。社内読者だって変わりはない。えらそうにきこえるかもしれないが、執筆する側の記者だって、専門家から丁寧な説明を受けているから、かなりのことまで理解しているもの、それまでは似たりよったりだったのだから、よく分かる。

八日の原研の実験というのは、こういうことだった。

原研は七年前から、大型のトカマク型核融合実験装置の建設を進めてきたが、ようやく本体が完成、予定通りプラズマができることを確認した。実験の最終目標は、臨界プラズマ条件を達成することだが、それはまだ二年半以上先のことで、それまでにはまだかなりの付属工事をしなければならない。この実験は、総額二千三百億円を要するビッグサイエンスの代表的

### 悩み多い科学記者

内山 幸男

なものである。

注や説明なしならこれでいいわけだが、まず核融合の説明がない。トカマク型も説明しなければならぬ。プラズマとは、臨界条件とは。さらに臨界条件を説明しようとする、閉じ込め時間という、説明のいる言葉が出てくる。

紙面に載った私の記事の分量は、最終的には五十七行だった。核融合やプラズマ、臨界条件など

の説明が、仮に一項目十行ずつとしても四、五十行かかる。十行で何ほどのことが伝えられるか、ということはさておき、それではニュース部分はほとんど残らない計算になる。これでは書く方も読まれる方もかなわないだろう。

実際の記事では、こうした注、説明的な部分は約二十行だった。

開き直るわけではないが、これが紙面にミニ太陽が出現する理由だ。私も、この言葉こそ使わなかったが、核融合の説明には「太陽の内部

で起きている核反応と同じもの」と書いた。

しかし、厳密に言えば

これは正しくないのである。人類がめざしている核融合反応は、当面、二重水素と三重水素の反応だが、実は太陽ではこの反応は起きていない。太陽には、三重水素はないのだから、起こりようがない。

ついでに言えば、核融合によって日本のエネルギー問題が永久に解決するわけ

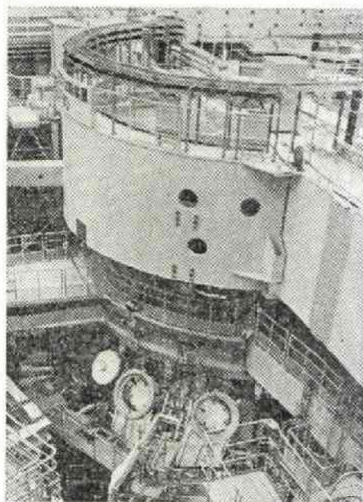
でもない。二重水素は、普通の水からいくらかでもとれる（現在一リットル二万円程度）が、三重水素の原料であるリチウムは、アメリカなどには豊富にあるが、日本には無いからである。しかし、読者には申しわけないが、これらを一一つ伝えるところまではとてもスペースがない。

事情は、先端科学を扱った記事の多くに通じる。それなりに努力してもどの程度真相が伝わっているのか。開発した人の苦勞、汗の臭いも伝えたいが、それも「説明」に食われて抜け落ちていく。

「まっぴら君」は、私にとって

痛烈な漫画だった。

(うちやま ゆきお 朝日新聞社科学部)



核融合実験装置JT-60の本体（茨城県那珂郡那珂町の日本原子力研究所）

# 江夏の挑戦

## ワーキングプレス

ロサンゼルスでの約十日間に渡る自主トレーニングを終え、江夏豊投手がアリゾナ州サンシティに入ったのは二月十日のことだ。

日本のプロ野球界で頂点を極めた三十六歳の左腕投手が、米大リーグのテストを受ける。選手宿舎に当てられた質素なモーター「グラブ・イン」の237号室が、このあと約二か月近くにおよぶ江夏投手の挑戦の拠点となった。

その夜、宿舎を叩きつけた雷をともし豪雨。部屋には雨がもった。

ミルウォーキー・ブルイーズ球団のはからいで、われわれ報道陣も同じ宿舎に泊まることができた。大リーグのキャンプは、日本のキャンプとは違って、選手が揃って朝の散歩をしたり、食事をとったりということがない。グラウンドにいるときだけが、球団幹部の管理下におかれ、そのほかの時間は選手個々の自主管理にまかされる。そのため江夏投手も私的な時間を、われわれとともに過ごすことが多かった。

報道陣の中に料理の得意なもの

がいて、カレーライスなど簡単なものから時には肉ジャガ、カツ丼までが宿舎の一室で料理され、江夏投手を招待しての晩さんが催される夜もあった。

大リーガー契約をしていない江夏投手への球団からの日当は、わずかに25ドル。週175ドルが、毎週末曜日に支給された。

「これは封を切らずに記念にしておくよ。オレの今回の挑戦の

### モーターでの合宿取材

西山和夫

唯一の報酬だからね」

大事そうにお願いいただいた時の江夏投手の顔が忘れられない。

すでに峠を過ぎた三十六歳の天才投手が挑んだ巨大なカベ。「無理」を承知の挑戦だった。しかし、自らをすすんでドン・キホーテ的な立場におけるものが極端に少なくなつた現在、この挑戦を間近に見られるわれわれは幸運だった。

大リーグでの実績などももちろん

ない江夏投手は、軽く見られることを嫌って、グラウンドでもメジャーの大選手同様の行動をとり続けた。米国のマスコミが最初に面白がって飛びついたのも、この点だった。

キャンプイン当初「態度だけは早くも大リーガー」などと、皮肉をこめて報道されたのもそのためだ。

「オレは日本で反逆児と言われた。大リーグの反逆児と言われるレジー・ジャクソンと対決して三振をとりたい」

CB Sのインタビュに堂々と答え、それが全米に流れもした。不遜にも見える江夏投手の言動に、球団担当のミルウォーキー・ジャーナル紙の記者が「態度だけではメジャーに上がれない」と、マニをひそめて見せたのもこのころのことだった。

しかし、現実にはオープン戦が始まって、何度か続けて大リーガーを抑えたことで、評価も微妙に変わっていく。ミルウォーキーに幸運を運ぶ男「これぞサムライ・マ

ン」の見出しがミルウォーキー・ジャーナルなど地元紙を飾ったという。

もっとも、オープン戦後半になって江夏が打ち込まれ、四月二日パームスプリングスでのレジー・ジャクソンとの対決に敗れたことで、隠された部分ではどこかいらだっていた米国野球ファンの心が、平静に戻ったようにも見えた。

この試合を取材にきていたCB Sのスタッフの一人が言った言葉が、また興味深かった。

「これでよかったのかもしれないよ。もしエナツが成功していたら、また一部で日米摩擦が……」

(にしやま かずお 中日新聞社東中総局報道部)



キャンプ初日、地元の少年の求めに応じアメリカで初のサインを

クラブゲスト

T・アジズ イラク副首相兼外相



専用機でニューヨーク、モスクワを回り東京へ。外相は昨年五月安倍外相とともにクラブで会見した。今度は一人で。

都市攻撃停止など部分停戦の可能性には「イランが和平を望むならば包括的和平しかない」。グルモイコ会談で、SS12の使用許可を求めたのではないか、との質問には「イラクは前提条件つきで武器を買ったことはない」。終止硬い態度の外相に、司会者は最後に「二度あることは三度あるといえます。今度お見えのときは、中東和平の報告にノ」【四月二日（月）記者会見 司会 中村實事務局長 通訳 池田薫 出席 六五人】

藤岡和賀夫 電通PR局長



「大正、昭和一ケタはアフリ世代、団塊の世代はアフリギリス世代、昭和三十年以

降をキリギリス世代」と言う。

産業と消費社会の間で、時代の様相や新現象を観察し、なぜか？を自問し続ける藤岡さん。「以前と流れが変わっている。昔の理屈は通用しない」。戦後復興と高度成長を経て、大衆の時代が去ろうとしている。グッチやデューボンを持つのはイモで、ノンブランドや輸入古着が売れる時代。新世代の関心は「良い悪い、高い安い」から「かわいい、おもしろい、カッコいい」へ。かつての規範や価値観の束縛から、豊かな社会が育てた感性が飛び立ち、それぞれの生き方を理解し合える同士が結集する「少衆」分立の時代へ。「デイスカパーやジャパンもいままらやれない。大流行で人を動かす時代でない。これからはポテンヒットの時代」。

衣食足りて、好きな仲間が集う移り気な時代。その時代の中核・キリギリスたちは新聞、テレビをどう受けとめるのか。「自分の感性で選択しなくてもよい存在として、新聞は受容されるだろう。テレビは裏の仕掛けを含めて見られているので、吸引力、影響力がすでに減少してきている」。【四月四日（木）研究会「さよなら大衆」司会 石山四郎企画委員 出席 七一人】

T・B・ゲジエンコ ソ日協会会長

海運相で党中央委員。日ソ友好五団体の招きで、四月五日から一二日まで訪日。



日ソ冬の時代の原因究明は「歴史家にまかせ、現実を踏まえ、前進することに努めようではないか」。ユーモアをまじえ笑顔で「この熟した機を逸しないように」と平和攻勢。質問に答える形で、文化協定ではほぼ合意に達しつつあることを示唆した。【四月二日（木）記者会見 司会 石丸和人企画委員 通訳 リュー・ハック 出席 六一人】

P・A・アブラシモフ 駐日ソ連大使



信任状提出から十九日目で、昼食会が実現した。前任のパブロフ大使は、三年間の在任中一度もクラブの招待に応じなかった。名うての硬骨外交官らしく、大使は日ソ冬の時代の責任は日本にあるとし、ソ連の論理を展開した。

「相互不信と危惧をなくするため善隣協力条約、非核条約、文化協定などいく

つかの提案をしてきたが、日本はすべてを拒否した。その上実質的な政治対話を中断し、経済制裁措置をとった」。

グルモイコ外相の訪日については、「実りあるものになるなら、近い将来、たとえば年内にも実現するかもしれない」としながらも、あくまで両国関係改善での具体的成果がなければ、訪日がむずかしいとの考え方を強調した。

ソ連のゲストは、五十六年五月のテレビショウ中央委員以来五十七、八年と途絶えていたが、昨年十月から今年の四月までに、アブラシモフ大使を含めすでに四人が登場。四人の中ではわざわざ辛口の話だった。それでも「毎月はムリだが、半年に一度くらいなら皆さんとお会いできる」「これから実は中国大使に会いに行くんです」と三十分も時間を延長して、サービスにもつとめた。【四月二日（火）昼食会 司会 阿部義正企画委員 通訳 セフチュクタ一等書記官 出席 一一九人】

金丸 信 自民党幹事長



翌十八日、創政会が第二回会合を予定していたためあって、総理昼食会なみ



ク ラ ブ ゲ ス ト

の出席者を集めた。政治漫画家からまたとない顔と言われるだけあって、二十七年間の政治家としての感慨をマクラにした話は意味深長。

「国民が望むのはおん念の政治でない。速いテンポで進む時代に七十、八十の総理・総裁では国民の要望に  
応えられない。年寄りの経験は、若い人の指南役となることで生きる」

「木曜クラブはオヤジが築いたもので、創政会はおヤジの親衛隊であり、対決のムードがつくられていることは遺憾だ」「解散には大義名文がある。しかしまずいと思っても、  
総理からやりたいと言われれば、それまでだ」【四月一七日(水) 社会司  
会 藤村邦苗企画委員長 出席 一八〇人】

L・A・アイアコッカ クライスラー  
I 社会長



クライスラー奇跡のたて直し、貿易摩擦での最強硬論者、自伝「闘魂の経営」の大ベストセラー、大統領候補のうわさも。これだけでも充分なところへ、滞日日程の大部分が完

全にコンフィデンシャルで(セキユリテ  
ィーも当然自前)、日本人記者との会見がこれだけに限定されたため、申し込み一八五人、当日の出席三二五人。

五〇人余りのカメラ取材のほか、七、八〇人のペン取材者が立ちっぱなしでの会見となった。十階ホールが一般に貸し出されていて使用できず、食堂と宴会場を連結にして会場を設営した。クラブでは前代未聞の悪条件の中での取材だったが、センスのよい質問が次々と出て、カメラマンも汗だくでむずかしいアングルをこなしてくれた。

アイアコッカ氏は冷静で自信にみちた態度に終止、最後は「マスコミはタフガイというが、子供たちにはブッシーキャット(子猫)と呼ばれている」と笑わしていたが、事務局は取材者のタフな仕事ぶりに脱帽するばかり。この会見を見事にとりしぎった有馬さんを見て、同氏は「日本女性の地位と力量をみなおした」と帰りのエレベーターで話していた。

【四月一七日(水) 記者会見 司会 有馬真喜子企画委員 通訳 池田薫 出席 三二五人】

A・M・ムボウ ユネスコ事務局長

ユネスコ改革について「改革は絶えず必要で、ユネスコは設立当初の原則、目的からされることなく、機能、効率をあげよう加盟国の協力態勢をつくらなければならぬ」。基本的な考えを述べるに



とどまる。どの質問にも形式的解答の色あいが強く、問題が単純でないのは分かるにしてもなんとなくシラ

ケタ空気が支配しがちの会見だった。  
【四月一七日(水) 記者会見 司会 石丸和人企画委員 通訳 三浦信孝 出席 八五人】

R・F・M・ルベルス オランダ首相  
応接室で署名のあと、「なにかひと」との求めに応じ、サイン・ペンをポール・ベンに持ちかえ、英語で「四百年の日蘭関係はいままでスリーピング・ビューティ(眠れる森の美女)みたい。美女は目覚めさせねばならない」と書いた。KLM(オランダ航空)機に山のよう

に積んでくるチューリップの球根や生花への、いわゆる非関税障壁への苦情が次々に四十五歳の青年首相の口をつく。だが多勢の随員、記者団がコソコソと私語をしあうのが目障りだった。【四月一八日(木) 社会司会 深谷憲一理事 通訳 米倉淑子 出席 一〇一人】



N・テビット 英貿易産業相  
はじめに英大使館が用意した冒頭声明文は「日英両国語で読むだけで三十分もかかる。一時間しかないのにもったいない」といったら、さっそく「五分ぐらいにし、質問をたっぷり受けたい」と快諾。



野口悠紀雄 一橋大学教授  
「まず税構造の問題と税負担率の問題を区別して考えるべきだ」。税構造改革の問題は、現行の所得税中心主義をどう考えるかに帰するので、「これをどう評価するかが税体糸論議の中心になる」。所得税のメリットと限界に触れた後、わが国の場合所得税中心主義の欠陥をどう補っているかを説明する。税負担の問題を考えるにあたっては年金や医療費増など福祉費用を、どの程度考慮していくべきなのがポイント。野口氏は、長期的に福祉関連の国の負担が増えていかざるを得ない、と判断する。社会の現実が所得税中心主義だけでは解決し得なくなっている点と、福祉財源ということから、所得税減税と引き合わせた大型間接税導入を提案する。【四月一八日(木) シリーズ研究会「税制改革かくあるべし」(I) 司会 広瀬二郎企画委員 出席 六〇人】

ク ラ ブ ゲ ス ト

配布声明とはまったく別に訪日の目的と成果を自分の口調で七項にきちんと整理して、じゅんじゅんと説いた。そして「中曽根首相とは目標は一致している」が、要は日本が



「早く」て「目にみえる」行動を「公平で」「相互性ある」「不透明でない」形でみせること、という。

「英国は労働問題を克服しつつある。昨年の西欧二大ストは西独とフランスでだった」と日産の対英進出を礼讃し、来年には「日英カーを西独へ輸出できる」よし。

苦学力行の士だ。公立中学を出て、フィナンシャル・タイムズ社のコピーボーイ。十八歳で空軍志願、パイロットになり、三十九歳で下院議員。五十歳で雇用相、二年前から現職。サッチャー首相の後継レースの先頭を走る。昨秋彼女が間一髪難を逃れた爆破事件で、彼が重傷。奇跡的に助かり政界に復帰した。【四月一八日(木) 記者会見 司会 中村真事務局長 通訳 宇高みちる 出席 五五人】

名 東 孝二 日本大学教授



増税の必要なしの立場。歳出削減の徹底と多様な公債の発行によるべきで、税痛のない大型間接税導入は重税国家へつ

ながると警告する。各国の事例からみて脱税を生みやすい税であること、あるいは税痛がなく徴税効率にも問題があるとす。 「所得税中心主義が行きづまってるのでなく、問題は、虫くいなから、それを是正すればよい」。安易に福祉社会を選択するのでなく、企業の完全雇用機能を強化し、資本、技術よりむしろ人材を重視した民間活力型社会を目指すべきだとする。【四月二日(月) 研究会「税制改革かくあるべし」(Ⅱ) 司会 広瀬一郎企画委員 出席 五一人】

高 原 靖 三菱商事常務取締役



電電の理事・研究開発本部長のポストから五十八年二月に三菱商事へ。総合商社の情報化社会への対応をきく。情報通信産業をめぐる環境変化や技術動向などの一般解説のあと、同社ですでに具体化された事業や準備・計画中のものをスライドを使用して説明。「通信事業で伸び

るのは初期投資負担の少ない第二種で、キャブテンのような一般情報売るニューメディアが定着するには最低で五年はかかる」との見通しも。【四月三日(火) 研究会「ニュービジネス」(Ⅴ) 司会 平田真巳企画委員 出席 五四人】

「毛主席と文革」についても、率直に感慨をこめ語った。文革は社会主義建設のためにならないと否定され、毛主席の評価は二分されると答えた。毛沢東の指導で今日の国家の礎ができたことをいねいに述べた後、「しかし、文革中の指導には間違いがあった。一三年にわたり、私は仕事から遠ざけられ隔離された。が、これも社会主義革命と社会主義建設にとっては短いエピソードにすぎないので、貴重な時間をこれ以上これに費すのはよしまししょう」。【四月五日(木) 記者会見 司会 新井明理理事長 通訳 程本華三等書記官 出席 二四五人】

一九〇二年生まれの八十三歳。二三年に入党、建国後は北京市長、全人代常務委員長、政治局委員兼中央書記処書記。六六年の文革で批判され、七九年政治局委員に復活、八三年から現職。

「どんな質問にでもメモなしで答えますから、なんでもきいてください」と中国側関係者から事前にきいていたが、「さすが実力ナンバー2」と感心させられた会見だった。

中国の経済・法制、日中協力、中ソ関係、中韓関係、ソウル五輪への参加、日本共産党との関係修復——などの質問に対して専門的知識に裏打ちされた、ハラのすわった答弁が返ってきた。



「シェルトツ、ペーカ」発言も財政・金融政策で内需を拡大せよといっているわけでない」。輸出が刺激になっはいるが、わで国はすでに内需中心の成長をしており、いわゆる「機関車論」は主要先進国では否定的なのが基調になっているとして、財政主導による内需拡大論をしりぞけた。体に似合わぬ小声で語る次官の催眠術にかかったのか、会場からの「カード質問」はゼロだった。【四月二五日(木) 研究会 司会 鈴木幸夫企画委員 出席 六一人】

山 口 光秀 大蔵省事務次官



「毛主席と文革」についても、率直に感慨をこめ語った。文革は社会主義建設のためにならないと否定され、毛主席の評価は二分されると答えた。毛沢東の指導で今日の国家の礎ができたことをいねいに述べた後、「しかし、文革中の指導には間違いがあった。一三年にわたり、私は仕事から遠ざけられ隔離された。が、これも社会主義革命と社会主義建設にとっては短いエピソードにすぎないので、貴重な時間をこれ以上これに費すのはよしまししょう」。【四月五日(木) 記者会見 司会 新井明理理事長 通訳 程本華三等書記官 出席 二四五人】

# スタジオ訪問

## ANNニュースリーダー

### 春の衣替え

### 45分のワイドに

「何かドーンと一本ほしいなあー」

四月十五日(月)午後三時半、当日の担当デスクがつぶやく。本番は六時からだ。デスクは、大事件が起きれば起きたで泣かされ、ニュースがなければ泣かないで泣かされる。

テレビ朝日報道局の『ANNニュースリーダー』編集デスク席。ネット各局とホットラインで連絡をとり、この日はネタ捜しとなる。

四時が過ぎた。まだラインアップが決まらない。「あと一分二十秒を、どうする?」。デスクの声が大きくなってきた。「四時半、季節の話題という事で、「和田湖へのバス開通」を四十秒、「高山まつり」を四十秒と決断、やっこの日のライアラップが決まった。

そろそろ各部からの原稿が集まってく

るラッシュ時間だ。それをキャストはストッブウォッチを持って音読。入念に下読みをくり返し、赤を入れていく。「追い込みになりそうだな」。原稿の出がちよつと遅いらしい。五時五十分、使用原稿一本の本記が間に合わないままメイト室へ。そして本番二分钟前、スタジオへ入った。

テレビ各局の報道番組が四月一日から春の衣替えをした。『ANNニュースリーダー』も新キャストに萩谷順さんを起用、時間も六時に繰り上げられ、四十五分のワイドとなった。情報量が多く、従来の二十五分間では消化しきれなくなっていたことが、ワイド化の理由のひとつ。

「おかげで、幅広い話題を、しかも深くじっくりと追いかけるようになりました」と大野弘義編集長。わかりやすく、国際的な広がりを持ったニュース番組にしたいとも言おう。しかしいまのところ、前半の二十五分間はテレビ朝日の関東エリアだけで、後半二十分だけがANN全国ネットとなっている。これは系列ネットの多くの局が六時から、自社のローカルワイドを組んでいるからだ。「将来は、なんとかこのワイドニュースを全国ネットに定着させたいですね」と大野さんは語る。

そこで番組の前半は、企画ものなどちらかというと軟派ニュースが中心になる。番組のトップではその日の主なニュースのリード部分だけ。「詳しくは後ほどお伝えします」ということになる。

新人の萩谷キャストは三十六歳、朝日新聞外報部記者から抜てきされた。大野編集長が大鼓判を押す、強心臓の持ち主萩谷さんも、本番初日は、相当にあがったらしい。「キューが出て話し出したけど、本番に始まったの、という感じで……」  
「終わってからのの方がガタガタふるえてきて、クエライコッチャー」と思いました」と語る。しかし今は、楽しく面白くやっていると笑う。

萩谷さんは朝日時代ドイツへ留学した時に、ラジオの日本語放送のアナウンサーを務めた経験がある。「基本的には原稿を読んでいるわけで、それをいかに理解しやすいように語りかけるかなんでも表現できればと抱負を語る。目下の悩みは服装。毎日メモを残し、洋服がダブらないようにしているそうだが、「苦痛」。

スタジオの萩谷さんの側にはいつも電話が置いてある。取材先や出先クラブの記者と本番中直接話するためのものだ。ワシントン、ニューヨーク、モスクワの各特派員と衛星でつながることもある。政

治部、外報部記者を務めた、萩谷さんのキャリアがキラッとひかる時でもある。

番組は六時スタートした。スタジオにはこの日から報道部へ配属された三人の新入社員も見学に来ている。本記が欠けていたネットニュースのトップ原稿「三菱自・タライスラー合弁生産」は、前半のCM放映中に届き、キャストへ渡された。そして六時二十五分、全国ネットニュースが始まり、四十五分、番組は終了した。

ところで、ことしの九月にはテレビ朝日のスタジオが港区谷町に完成する予定だ。報道部も移転する。最新鋭の機器・設備が整った新スタジオからの「ニュースリーダー」は、さらにニュースを追う「リーダー精度」を増すことになるだろう。



CM中、原稿の再確認をする萩谷キャスト(中央)と野崎アナウンサー

# プロフィール

五月一日付入会の個人D会員、法人・個人賛助会員、特別賛助会員の方がたです。

### ゴルフの会

前日の春の嵐は一転、穏やかな日差しにつつまれた四月五日、第42回ゴルフ会が催された。程ヶ谷CCには、空前の三十五人が集まった。七人が初参加、二人がご婦人である。

午前九時、ゴルフ場側の配慮でアウ

ト、インの二グループにわかれてスタート。色づき始めた芝を踏みながら、白い果実が天に向かって熟れ切ったようなコブツ、目にしみ入るレンギョウの真黄色、白くかれんにしなだれる雪柳などなど春の草花に心を奪われる。

スコアが悪かったのは花が美し過ぎたからだ。

程ヶ谷で優勝——本人自身はもとより参加者三十余人のだけれどが考えていなかった。

その証拠に村上重美世話人が表彰式を宣言し

「アッ、

つしより、二位に落ちた沢木成美氏は文字どおり涙でぐっしより。申しわけないことをした。

野球グリップにしたことが私にとつては大変

プラスになった。

### 涙でぐっしより——程ヶ谷優勝

間違いだ」あわてて表示してある成績表を訂正したことを知れば、直ちに理解できるだろう。

私は十一位からの逆転優勝に涙でぐ

い。

一層の切磋琢磨を心がけていきたい。

(今 静行)

スコアがよかった方々は次のとおり。

優勝・今静行(D) NET 72、二位・沢木成美(水産経済) 73、三位・山本道雄(DII初参加) 73、B B・豊島伸郎(佐賀)、B G・沢木成美。

確定した順位は以上のとおりだが、この日はおよそ十分間、二位の沢木さんは優勝したと思ひ、四位の平田真巳さん(共同II初参加)は三位に入賞したと喜んでた。これはスコア係をつとめた世話人の片割れの計算能力に問題があったためで、当人はそのアクションを予測してかブービーマーカーの座にすわって、次回からは電卓を携行して誤りなきを期します、と深く反省していることをお伝えする。

次回は七月十九日(金)、我孫子GCで。ご案内は次号で。



▼私は通産省の「石炭鉱業審議会」の経営部会長をしています、この夏から、最後の石炭政策といわれる第八次石炭対策にとり組む

ことになりました。日本の石炭産業が生き残れるかどうか、最後の選択を迫られているだけに議論もふつと、どうやら暑い夏になりそうです。(田中洋之助)

▼月刊誌の連載がこんなにキツイ作業とは。このクラブにも常備してある「エネルギー」誌に昨年正月号から始めて今やつと最終回を脱稿したところ。連載は題して「青年期を迎えた日本の原子力発電」。トロッコ時代の原設計画取材から始めて最後は文化論まで。その粗雑を反省もせず、一冊にまとめるつもりでいます。刊行されたらぜひお目通しを。

(岸本 康)

日本記者クラブ賞選考委員会

(4・9 大会議室)

クラブ賞推薦委員会の内田健三委員長の報告を受けた後、協議した結果、残念ながら「本年度は受賞者なし」を理事会へ答申することに決めた。

出席 渡辺(襄)委員長。渡辺(恒)、細

谷、原、若松、田中、東、山田、

泉の各委員。新井理事長。

第七期役員選出委員会(4・9 大会議室)

値段のないメニューについて

ある日の施設運営委員会で、記者クラブのレストランメニューに値段が書いてないのを見て、「馬鹿にするな」と怒っているゲストがいた、という話が出た。値段を書き入れた方がいいのではないか、というわけだ。

このような誤解をもっている会員も意外に多いのではないか、ここはひとつ野暮を承知で値段のないわれを会報に書いておいた方がよいらう、という事になった。

値段のないメニューは、ゲストに対する大変な敬意の表明である。客に対して、値段などを思わずらわず、どうぞ好きなものを注文してください——という呼びかけであり、こうした

第87回理事会の決定に従い、総務委員

会委員によって、役員社構成案等について協議した。

出席 渡辺(襄)委員長。渡辺(恒)、細

谷、原、若松、田中、東、山田、

泉の各委員。新井理事長。

第122回企画委員会 (4・15 小会議室)

司会をした各委員から行事報告の後、五月のクラブ行事とゲスト選考について

メニューをみた客は、ホスト役に感謝し一流レストランに招待されたという感じをもつのがふつうである。

問題は我が記者クラブの九階のダイニングルームが、こうした値段のないメニューを出す雰囲気と実力を備えているかどうかだ。原則に従って高級レストランの感じを保ちつづけるために、値段のないメニューを貫くべきか、それともここで妥協して値段を書きこむべきか。それは会員諸兄が決する問題だろう。新メンバーによる施設運営委員会がこうしたテーマで議論をつづけるといっても、楽しいことではないか。

はなはだ文化性の高いテーマ(?)  
だと思いがどうだろうか。  
(施設運営委員)

協議した。

出席 藤村委員長。本島、伊藤、阿部、

山岸、広瀬、平田、有賀、石丸、

高野、尾崎、武藤、鈴木、河野、

有馬、石山、中沢の各委員。

第17回施設運営委員会(4・19 小会議室)

次のような貸室料金の改定案を理事会に答申することを決めた。①貸室料は各部屋ごとに現行の25〜100%の幅で値上げする。②超過時間の算定単位を一時間とする。③クラブ利用費を廃止する。④改定実施は八月一日とする。

出席 小林委員長。和田、宮地、山崎の

各委員。

第12回監事会(4・20 大会議室)

昭和五十九年四月一日から六十年三月三十一日までの会計監査を行い、決算案を承認した。

出席 谷田、白鳥、日下部の各監事。

第31回総務委員会(4・24 小会議室)

昭和六十年年度事業報告および収支予算原案を承認。剰余金処分案を含め理事会へ上程することを決めた。また、八階に会員用の貸室として、約二十坪借り増す件について協議、これにともなう支出増の処理の仕方などを決めた。

出席 渡辺(襄)委員長。渡辺(恒)、細

谷、田中、東、泉の各委員。新井理事長、中江、常盤両副理事長。

第89回理事会(4・24 大会議室)

一、昭和五十九年度事業報告・収支決算総務委員会案を承認。剰余金一二、五五五、五九八円の処分案を決め、総会へ上程することにした。

一、昭和六十年年度日本記者クラブ賞は「受賞者なし」を決定した。

一、八月一日からの貸室料金改定に関する、施設運営委員会からの答申を承認。

一、八階に会員用の貸室として約二〇坪を借り増すことを決定。インタビュー、座談会、会議、会食に使えるよう、施設運営委員会が細部をつめることにした。

一、役員選出委員会の渡辺(襄)委員長から、第七期の役員構成社案と理事長、副理事長、各委員会委員長人事の調整の進め方について説明があり、これを了承した。

一、四月一日付での会員入退会を、会員資格委員会答申通り承認した。

出席 新井理事長、中江、常盤両副理事長。渡辺(襄)、渡辺(恒)、細谷、

小林、下村、藤吉、南里、田中、

東、藤村、深谷、泉の各理事。白鳥

監事。

# 写真部

## 屋上に鳩がいた日

写真 高瀬 晃  
(東京新聞 写真部)



新入社員を迎えての、ビールパーティーでしようか。この宵、冷え込み強くブルブルパーティー。マフラーまきつけ、毛布かぶって、カイロモミモミして、さあ乾杯。

幹事さんの心くばりがほかほかと伝わってくるショットであります。この四月、日本全国あっちこっちで、新入社員歓迎パーティーが開かれ、ビールが消費され、ユーモラスな自己紹介に笑いのはじけたことでしょう。三十数年前の、新聞記者になりたてのころをふと思ひ起します。

最初の給料日。同期生打ち揃い指導の先輩をかこんでやはりビールパーティーでした。その童顔いま白髪となり、また故人となったひと。あのころはそう、遠くから記事や写真を送るのに伝書鳩でした。鳩係からその心得を伝授されたものです。会社の屋上には鳩舎があつて毎朝、鳩の群れがゆっくり社屋の上空を旋回していました。

鳩に原稿を托した時代の新聞。鳩といっしょに新聞をつくったことがあるなんて、胸が熱くなります。鳩係になりたいと思ったことも実はあったのです。

(増田れい子)

第60回会報委員会(4・10 大会議室)

四月号について意見を交換した後、五月号の編集について協議した。

出席 深谷委員長。桂、井出、安延の各委員。

第92回会員資格委員会(4・12 小会議室)

フジテレビジョンの上野一彦氏から有泉一雪氏(国際局涉外担当部長)への委員交代を事務局から報告。五月一日付の会員入退会について審議し、理事会へ答申した。

出席 渡辺委員長。中川、小池、加藤、樋口、林、玉井、有泉、埜邑、長竹の各委員。

アイアコッカ氏から自伝の寄贈

四月十七日、クラブで会見したリー・アイアコッカクライスラー会長は、ベストセラーを続けている「アイアコッカ——わが闘魂の経営」(ダイヤモンド社)にサインをし、クラブへ寄贈しました。ラウンジの書棚に置いてありますので、ご覧ください。

ビジョンボックスに消息を

会員の消息欄「ビジョンボックス」へご寄稿ください。一〇〇〜一五〇字程度で、出版予定、転居のお知らせ、旅行の予定など近況を、毎月十五日までに事務局へお送りください。

大評判 ローカロリーメニュー!

四月からレストランメニューを改定しましたが、新顔のローカロリーメニューが大変な好評です。海の幸のサラダ、たらのヨーグルトソース、虹ますのアーモンドソース、鯖の網焼き日本風。これが四月の四品です。一週間毎にメニューが変わります。約四〇〇カロリーで値段は一、〇〇〇円前後ですが、一般のローカロリーメニューに比べ、味よしセンスよし値段も手ごろと、三拍子そろってうけています。昼・夜のレストランで召しあがれますので、お試しください。

昼食会のキャンセルは一時間前までに

昼食会に申し込んだあとで、都合が悪くなった場合は必ずキャンセルの電話をクラブ受付へお願いいたします。キャンセルは昼食会の一時間前まで有効です。無断で欠席の場合は、会費(食事代)をご負担いただくこととなりますので、ご協力願います。

コピーはセルフサービスで

受付前のゼロックスはセルフサービスでご利用いただけます。料金は一律一枚三十円、縮小・拡大も可能です。初めての方には、フロアマネジャーが使用方法をお教えいたしますので、受付へお申し出ください。

ゲスト・カート

ビル・ウエルマン(ニューヨーク・タイムズ)

会員の著書(ご恵贈いただきました)

天万毛万九万

井出 新六

展覧会の招待券 平野光男会員(西武百貨店)から「秋野不矩自選展」「世界の絵本原画展」を、毎日新聞社から「スタンラン展」「現代日本美術展」を、白土盛会員(個人D)から「85ジャパン ハーブショウ」の招待券をご恵贈いただきました。お礼申しあげます。

五月の行事(8日現在)

17日(金) 午後2時〜4時 シリーズ研究会「ソ連—その実態と意図」(IX) 菊地昌典 東京大学教授 クラブ記者会見室  
20日(月) 正午〜午後2時 真藤恒日本電信電話 会社社長昼食会 プレスセンターホール(10階)

午後5時〜6時 総会記念講演会『歴史と情報』 陳舜臣氏 クラブ記者会見室

午後6時〜8時 会員懇親会 クラブ 宴会場・レストラン

22日(水) 正午〜午後2時 オザール トルコ首 相昼食会 クラブ宴会場

会報委員長 深谷憲一

委員 桂敬一 井出新六 斎藤吉史 安延久夫  
連絡 長谷川 河野(事務局) 五〇三—二七二一